

唯識学派の極微論をめぐる問題

——極微論受容の意図について——

加 藤 利 生

唯識学派が、その外界非実在性論証に於て仏教内外の極微論を批判することはよく知られている。しかしながら、それと同時に、この学派には、『瑜伽師地論』以来の独自の極微論が継承されていることが知られる。

唯識学派の極微論の特徴は、極微を覺慧による分析によるものとして実体視せず、極微の積集の量的把握、つまり、塵色の構成員としての極微という実体的な量を持つ存在を認めない点にある。極微という概念は、本来仏教が有していた物質観にはなく、おそらくは外教の影響の下に、先づ有部に於て受容・導入されたと考えられている。では、この本来実体的なものとして扱かわれてきた極微という概念を、非実体的なものにすり変えてまで唯識学派が受容し用いたのは何故なのであるのか。『瑜伽師地論』巻五十四には、唯識学派が極微を説く目的とも考えられる極微建立の五種の勝利が挙げられている。本稿では、この五種勝利を中心に、唯識学派の極

微論受容の意図について考察を加えたい。

『瑜伽師地論』に説かれる極微建立の五種の勝利とは次の五つである。

- (1) 由下分析一合聚色二安立方便三於所緣境便能清淨廣大修習
- (2) 能漸二斷薩迦耶見一
- (3) 如能漸二斷薩迦耶見一如是亦能漸二斷憍慢一
- (4) 能漸二伏諸煩惱纏一
- (5) 能速疾除二遺諸相一

この『瑜伽師地論』の所説について、『顯揚聖教論』には言及が認められないが、『大乘阿毘達磨集論』では、これらが次の二点にまとめられている。

- (6) 為遣一合想故
- (7) 為悟入諸有色非眞實故

さらに『大乘阿毘達磨雜集論』では、先の(6)(7)に対し説明を加え、次のように述べている。

問若諸極微無實體性何故建立。答爲遣一合想故。若以覺慧分分析所有諸色。爾時妄執一切諸色爲一合想即便捨離。由此順入數取趣無我性故。又爲悟入諸所有色非眞實故。若以覺慧如是分析所有諸色至無所有。爾時便能悟入諸色皆非眞實。因此悟入唯識道理。由此順入諸法無我性故。

つまり、先の(6)(7)に対しここでは

(8) 由此順入數取趣無我性故

(9) 因此悟入唯識道理。由此順入諸法無我性故

と解説が加えられ人法二無我への悟入のため極微が説かれるとされる。このような、色の無から人法二無我へ悟入するという図式的説明は別として『瑜伽師地論』の説く五種勝利の内容は、極微論との関わりが曖昧であり、特に(3)(4)に述べられる憍慢や煩惱等と極微との関係は理解しにくいものであるといえる。そこで極微との関連が比較的理解しやすい薩迦耶見と極微との関係を手がかりに、この問題の考察を進めた。

薩迦耶見と極微論との関係については、仏教の極微論資料として確認し得る最古のものとされる『大毘婆沙論』巻八に引用される『六法論』の所説との関わりですでに論及されており、極微論を仏教が取り入れた当初から、有身見と極微との関係が意識されていたことがうかがわれる。

問爲有緣一極微起薩迦耶見不。設爾何失。若有者此應是正

唯識学派の極微論をめぐる問題（加藤）

見非薩迦耶見。所以者何。要眞實行智方見極微故。若無者六法論說當云何通。如彼論說。極微是常各別住故。此各別住非無常因。是故極微決定常住。彼說云何證此見緣極微。彼說下邊執見緣極微爲境。證有身見亦緣極微。身邊二見所緣一故。答無緣一極微起薩迦耶見。問若爾六法論說當云何通。答彼論所說不順正理不可證此緣極微。謂彼論中更說多種不順理因不可爲證。有餘師說。有緣一極微起薩迦耶見。問若爾此應是正見非薩迦耶見。答此約所緣故說有。非約現起故說有。評曰。彼說非理。所以者何。如何此見能住所緣而不能起。是故前說於理爲勝。

ここでの議論は、一極微を縁じて薩迦耶見を起こす者が有るか否かというものであり、若し「有り」とすれば、それは正見であつて薩迦耶見とは言えないし、「無い」とすれば『六法論』の所説に違ふというものである。ここに見られる『六法論』の所説をまとめると「極微は常住であり、身邊二見の所縁は一であるから有身見も邊執見も極微を縁じる」というものである。『婆沙論』は『六法論』の所説には他に多く正理に順じない説が含まれるから引証にならないとして退け、一極微を縁じて薩迦耶見を起こす者有りとする説については極微を縁じて起きるのは薩迦耶見ではなく正見であるとするのを理に於て勝ると評している。これは、認識可能な極微は七極微より成る微塵であり、これを見ることのできるのは天眼・転輪王眼・住後善菩薩眼の三のみであつて凡夫には認識

されないから、一極微を縁じて生じるのは薩迦耶見ではなく、真实行智による正見でなくてはならぬと考えているものと思われる。また『婆沙論』巻八には『六法論』の所説に關連して「五蘊に於て一合想を起し執して一我と為す」という表現が見られ、(6)で『集論』が、「爲遣一合想故」と述べた一合想とは、五蘊等を全体として一としてとらえることであることが知られる。これらのことから、極微と有身見との関わりは、色あるいは五蘊を我と執する際に、その構成要素としての極微を考えているためであることがうかがわれる。

有身見に対する有部と唯識学派の立場の違いは、有身見を断じるために、有部では、色を極微にまで分析し、色の究極の構成要素である極微の实有に對しその集合体である色・五蘊の總体を仮とすることにより有身見を断じるのに對し、唯識学派は色の实在性を否定することにより有身見を断じようとする点にあり、そのため、一般に色の究極の構成要素とされていた極微を非実体的な概念にすりかえた上で受容したものと考えられるのではなからうか。

以上、有部と唯識の極微論初出文献から、有身見を断じるということと極微を觀ずるということが深く関わっていたことを知ることができた。そして、この有身見を断じるということが、仏教が極微という概念を用いるに至った大きな要因であったという視点から改めて『瑜伽師地論』の説く極微建

立の五種勝利をながめるならば、極微論との関連が曖昧に思われた(3)(4)について、それが、非実体的極微を觀じることにより、所縁の境を觀察し諸相を除遣し、薩迦耶見を断じ、我と我法に對する執着を離れることにより、薩迦耶見から生じる憍慢や煩惱から離れるというように、いわば二次的な意味で、極微を説くことの効用として挙げられているものと理解することができるであらう。

1 瑜伽行派の極微論については、拙稿『瑜伽師地論』に見られる瑜伽行派の極微論の特色」（印仏35―2）「瑜伽行派の物質觀をめぐる問題」（宗教研究61―4）の他、早島理氏による一連の論文『顯揚聖教論』に見られる極微説（印仏37―1）「極微説管見―瑜伽行唯識学派を中心に―」（長崎大学教育学部人文科学研究报告第38号）がある。

2 極微を量的に抜かう有部系の定義は大27702 a・大28886 c大2962 a b大29521 b c・大29855 b等に示される。

3 上杉宣明「説一切有部の極微論研究」仏教学セミナー24・p37

4 大30598 b

5 大31675 b

6 大31721 c

7 大2737 b c

8 『婆沙論』巻136大27702 aによる。同様の所説は、大28886 cに説かれる他、大25867 cにも類似した表現がある。

9 大2738 a

※本稿は宗教研究61―4の拙稿に続くものであるが、前稿の注7に挙げた資料について誤りがあるのでこの場を借りて訂正しておきたい。誤、大31575中↓正、大31675中

△キーワード▽ 極微論、有身見、『瑜伽師地論』、『六法論』

（龍谷大学大学院）